

2023年12月20日

関係各位

城西現代政策研究編集委員会

研究推進委員会

第13回 城西現代政策研究会開催について（案内通知）

謹啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび現代政策学部において、第13回城西現代政策研究会を下記の通り開催することとなりました。ご多用中とは存じますが、万障お繰り合わせの上、ご出席のほどよろしくお願い申し上げます。

敬具

記

日時 2024年1月24日（水）15:35時～17:15時

場所 清光会館-301

発表者 塚越 健司 氏

タイトル 「フーコー思想からみた『定量化された自己』現象」

司会者 淵田 仁 氏

報告の要旨

自身のパーソナルデータをデバイスを通じて収集・分析するユーザーの存在は、2000年代後半からアメリカで注目されてきた。「定量化された自己：Quantified-Self」と呼ばれるこの現象は、Apple Watch等のウェアラブルデバイスの普及に伴い、現在は企業や政府にとっても関心を集めている。本発表は「定量化された自己」現象について、仏ミシェル・フーコーの「自己への配慮」という概念を軸に、その可能性と課題を検討する。

お問い合わせ先：第13回研究会担当 ベルトラニチュ（bber@josai.ac.jp）

各位

2024年1月24日

## 第13回 城西現代政策研究会（総括）

先にご案内した第13回城西現代政策研究会が無事終了いたしました。後期試験の最中の大変に忙しい時期にもかかわらず、多くの方のご参加をいただき、積極的な議論が展開されました。今回の研究会の様子は、下記の通り、司会者が簡潔にまとめてくださいました。

日時	2024年1月24日（水）15:35～17:15
場所	清光会館301
発表者	塚越 健司 氏
タイトル	「フーコー思想からみた『定量化された自己』現象」
司会者	淵田 仁 氏

### <司会者による総括>

塚越先生のご報告では M・フーコーの晩年の思想である「自己への配慮」概念の多面的評価を踏まえつつ、昨今の情報技術で重視される「定量化された自己」の問題が検討された。報告後の質疑応答では「定量化」の権力性の是非、愚行権の問題、現実の政策上の問題といった多岐にわたる論点が議論された。

以上

城西現代政策研究編集委員会・研究推進委員会

委員長 市川直子

現代政策研究会発表レジュメ  
フーコー思想からみた  
『定量化された自己』

2024.1.24 @城西大学

現代政策学部助教：塚越健司

## 発表の背景と目的

- ・ウェアラブルデバイス等の普及によって、パーソナルデータ分析が進み、個人の行動のあり方や生産性向上に関する議論が活発化している。(1)

→世界経済フォーラムは2011年、パーソナルデータを「新しい石油」に例えるほど重視する一方、個人情報管理を巡って、世界中で議論が巻き起こっている(2)(3)。

- ・パーソナルデータやビッグデータといった巨大なデータ管理が身体の資本化を推し進め、政治権力や企業による「アルゴリズム統治」の過剰を生むという懸念がある。

→本発表は、これらの課題に対して、データによる「自己統治の可能性」という観点から、ミシェル・フーコーの「自己への配慮」概念を通して分析を行う。

## 前提①データ統治の懸念

- ・ 中国では民間企業による「社会信用スコア」や、国家による「社会信用システム」など、パーソナルデータによる管理を打ち出されている。  
→実際の評価等は定まっていないが、2020年のコロナ禍でも、これらのシステムは様々な観点から議論された<sup>(4)</sup>。
- ・ 議論の中でも注目されるものに、「アルゴリズム統治」および「生活全般のスコア化（格付け）」、さらに健康管理などをはじめとした、スコア化による「自己責任化」がある。<sup>(5)(6)(7)(8)</sup>

## 前提②情報自由主義時代

・一方、大量のパーソナルデータを含む「情報自由主義時代 (info-liberal age)」と呼ばれる現代社会には、以下のような特徴がある<sup>(9)</sup>。

①web2.0とモバイル・ウェアラブル技術による情報の生成・流通。

②政府と市民の間のデータ生成・共有が進み、社会統治には「データ接続」が不可欠となっている。

③データの「民主化」が進み、データ自体が道具として重視される。

→情報技術を用いる企業や政府による情報統治が懸念される一方、「個人による情報収集プロセスの民主化」が進んでいる。

※その一例が「定量化する自己」運動

## 自己への配慮

・ M.Foucaultは古代ギリシアの「自己への配慮（ Le Souci de soi[仏], the care of the self[英]）」の観点から、情報技術と自己統治の関わりを検討。

→フーコーは、ソクラテスの有名な「汝自身を知れ」（gnothi seauton）という、自己認識に至る知恵の獲得を言葉に対比させる形で、同じくソクラテスが述べた「自己への配慮」（epimeleia heautou）に着目。

→自己への配慮は知恵の獲得ではなく、自らの生き方を変容させるための実践であり、自己に関係するための方法論である<sup>(10)</sup>。

→現代的な視点では「**パーソナルデータの可視化**」によって、ユーザー自らが自己に配慮し、情報を利用した自己変容の実践を行っている。



## フーコーの新自由主義解釈

- ・ 1970年代から生じた新自由主義的統治は、個人を「企業」に見立てている。  
→個人の企業化＝自己責任化が進むという批判の一方、フーコーは1970年代当時、国家統制主義、およびヒューマニズム的統治への抵抗として、新自由主義を肯定的に捉える側面が見受けられる（ヒューマニズムなしのリベラリズム）

(11)(12)(13)。

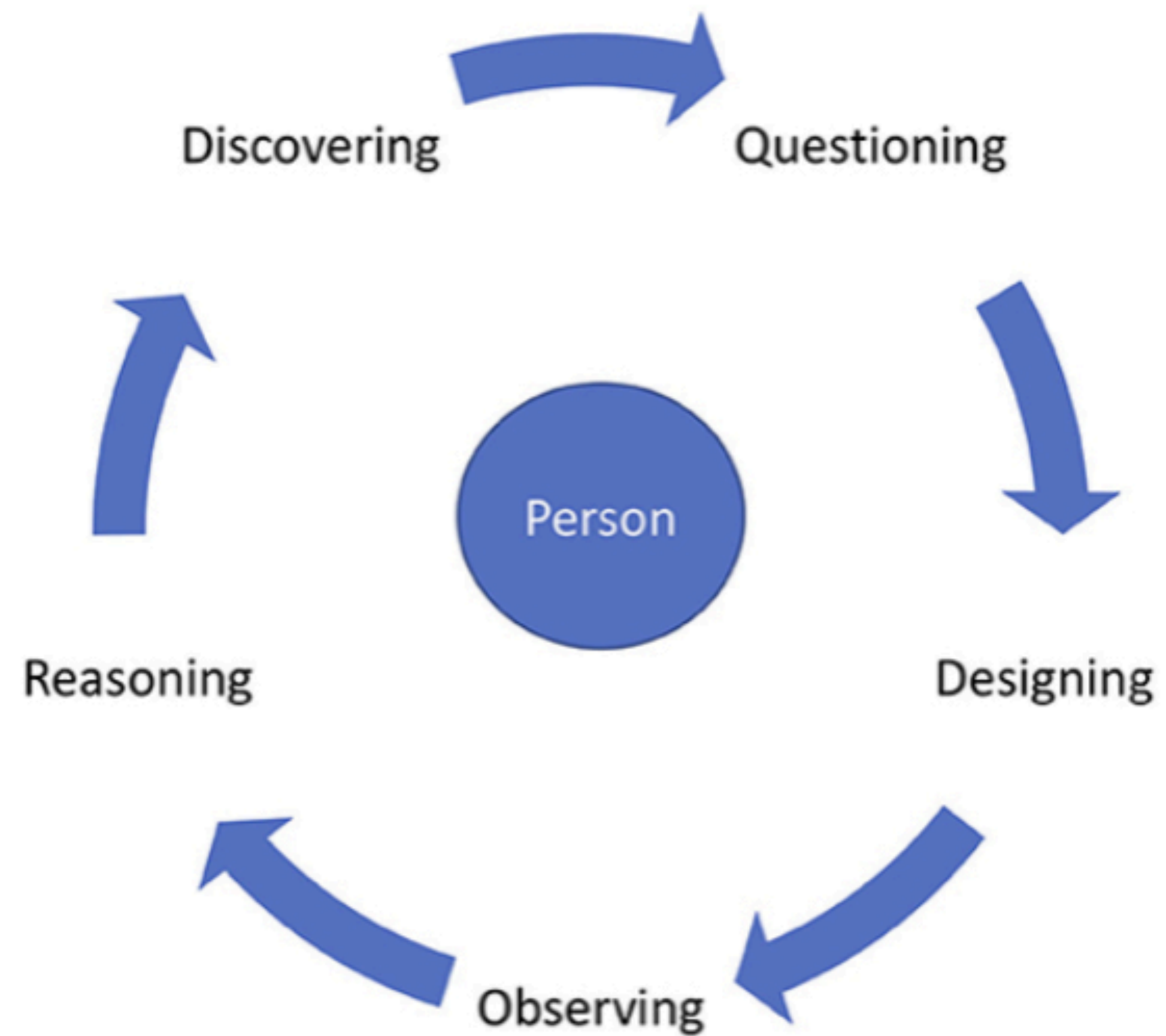
- 新自由主義的体制と情報自由主義的な体制においては、自己への配慮として、常に「**自分自身の専門家**<sup>(14)</sup>」として、自己超越、また社会関係の刷新の契機として機能し得るのではないか。

- ・ 「新自由主義は、個人が自発的に監視に応じ、選択の自由があることを評価する一方で、この新自由主義の状態は解放と混同されるものではなく、むしろ個人が自律的、生産的、自己規制的に育成される自己実現の感覚である」



# Quantified-Selfとは何か？

QUANTIFIED SELF  
SELF KNOWLEDGE THROUGH NUMBERS



## QSとは

- ・ 「Quantified-Self（定量化された自己。以下QS）」は、米『Wired』誌の編集者、Kevin Kelly とGary Wolfによって2007年に提唱され、2008年にウェブサイト（[www.quantifiedself.com/](http://www.quantifiedself.com/)）を開設。

- ・ 彼らの「**数を通じた自己認識self-knowledge through numbers**」というテーマに対して、「**データ駆動型の生活**」や健康管理に関心を持つユーザーに注目され、コミュニティが形成されている。

→QSは「定期的な自己情報の収集・記録・分析を行うことで、身体や日常の習慣に関する情報を統計や図表に表し、管理すること」と定義できる。

※デバイスはApple Watchなどのウェアラブルデバイスとスマートフォンなど。

## QSとは

- ・HPの開始以来、QSは国際的に拡大しており、30カ国100以上のグループ、少なくとも約20000人が参加している<sup>(15)</sup>。またアメリカの成人の10人に7人は、ヘルスデータのトラッキングを行っている。<sup>(16)</sup>

- ・QS運動の背景には、ライフログをセルフトラッキング（自己追跡）可能なデバイスやアプリの存在がある。

- すでに数百種類以上のツールがあり、テレビの視聴時間、睡眠、仕事の生産性、学習の進捗状況、目標の達成状況等について、監視・分析を可能とする。

- 自己の生活があらゆる意味で「**数値化**」されている。

# Luptonによるセルフトラッキングの類型化 (17)

## ① 「私的なセルフトラッキングprivate self-tracking」

→自己認識や自己最適化を目指す利己的活動

## ② 「共同体的なセルフトラッキングcommunal self-tracking」

→他者とのデータ共有によってデータの改善を目指す

## ③ 「押し進められるセルフトラッキングpushed self-tracking」

→ナッジによる生活習慣の改善を目的とした行動変容、動機づけ手段

## ④ 「押し付けられたセルフトラッキング imposed self-tracking」

→仮釈放中の囚人の管理

## ⑤ 「搾取されるセルフトラッキングexploited self-tracking」

→データ収集が企業のビジネスに転用され、不利を被る

※①②は肯定的に、③④⑤は否定的に語られることが多い



## 自己統治としてのQS(①②)

- ・再帰的自己モニタリングを可能とするQSにおいては、データの妥当性や可視化の方法など、「自分のデータを管理する」ために、カンファレンスやミーティングが行われる。

- ・例えばあるユーザーはトラッキングによって、自身の読書の大半が白人男性作家のものであることが判明。分析を行う中で自らの「偏り」を可視化する技術をもたらす。

→彼らは「数字」の分析を通して、「自分自身の専門家」を目指す。

- ・あるユーザーは、夫婦の夜の営みに関して2週間のトラッキングを行った。そこで得られたものは性生活の内容だけでなく、「何が性生活を構成するか」という夫婦の認識の枠組みを更新する契機となった。(14)

→QSを通して、様々な現象が新たに解釈・再構築され、既存の社会規範、権力システムと個人との結びつきが明らかになる。

## QSへの批判と反論(③④⑤)

- ・ データ統治によって不利を被るのはユーザーという批判

→制度設計の変更（個人情報保護法等）によって、現状における不満は取り除くことは十分に可能であると考えられる。

- ・ データ管理による「自己責任化」批判

→「自己統治」を適切に管理・運用するための方法論（デジタルデバイド等）の整備によって乗り越えられる可能性も。

→外的な要因から行われるトラッキングは、社会的に有益であったり、自らの意思では実行し難い実践を行うことができる可能性も（ex.攻撃衝動を抑えるための動機の、外的な調達）。

- ・ QSが自己への配慮として自己変容と社会変容を可能ならしめる一方、その実践が生産性の向上、すなわち「企業家としての主体化」に限定される可能性がある。

→それは別の意味で現在の「規範的価値の強化」であり。今後も検討が必要。

ex.金銭以外の報酬によって作業員を誘導するゲーミフィケーションのように、企業がQSによる実践に介入する場合がある。(18)



## ■ 今後の課題

- ・ セルフトラッカーの実践の分析<sup>(19)</sup>。
- 情報との主体的な関係≡自己への配慮分析

【謝辞】本研究はJSPS科研費（20H01582）の助成を受けたものである。

## 参考文献

- (1) 矢野和男,(2014) 『データの見えざる手: ウエアラブルセンサが明かす人間・組織・社会の法則』 草思社
- (2) 佐藤一郎,(2016) 「ビッグデータと個人情報保護法：データシェアリングにおけるパーソナルデータの取り扱い」 『情報管理』 58巻 11号:828-83
- (3) World Economic Forum. "Personal data: the emergence of a New Asset Class". [http://www3.weforum.org/docs/WEF\\_ITTC\\_PersonalDataNewAsset\\_Report\\_2011.pdf](http://www3.weforum.org/docs/WEF_ITTC_PersonalDataNewAsset_Report_2011.pdf).
- (4) デイヴィッド・ライアン著,松本剛史訳 『パンデミック監視社会』 ちくま新書,2022年。
- (5) 中国の社会信用スコアについては, 塚越健司 「電子決済の普及で中国人が「道徳的」に？」 *wedge*,2017. <https://wedge.ismedia.jp/articles/-/9793> また山谷剛史 「中国信用社会に向けたネットの取り組み ～芝麻信用の信用スコアが消費行動を変えた!?～」 *KDDI 総合研究所R&A*2018年9月号,」 <https://rp.kddi-research.jp/article/RA2018009> を参照。
- (6) JOSH CHIN and GILLIAN WONG 「中国が強化する社会統制：市民を信用格付け」 『ウォール・ストリート・ジャーナル』 ,2016.11.29. <https://jp.wsj.com/articles/SB10604864507425704319504582465583140464936>
- (7) Melissa Heikkilä 「中国「社会信用スコア」への誤解はなぜ生まれたか？」 *MIT Tech Review*,2023.1.04 <https://www.technologyreview.jp/s/291639/the-ai-myth-western-lawmakers-get-wrong/>
- (8) 中国の事例は,スコアリングによる格付けの他,権力の現代的なあり方など,様々な論点が存在する。より詳しくは堀内進之介 「情報技術と規律権力の交差点—中国の「社会信用システム」を紐解く—」 『人文学報』 第515-1号,首都大学東京人文科学研究科,2019.を参照。
- (9) Catlaw, T. J., & Sandberg, B., “Dangerous Government”: Info-Liberalism, Active Citizenship, and the Open Government Directive. *Administration & Society*, 46(3), 223–254.,2014. <https://doi.org/10.1177/0095399712461912>

## 参考文献

- (10) M, Foucault, (2001) *L'herméneutique du sujet*, Gallimard, 廣瀬浩司/原和之訳(2004) 『主体の解釈学』 筑摩書房
- (11) フーコー (2004=2008) 慎改康之訳 『生政治の誕生』 新潮社
- (12) 塚越健司(2018) 「ミシェル・フーコーにおける新自由主義理解」 関東社会学会第66回年次大会
- (13) Michael C. Behrent (2016) ,*Liberalism without Humanism: Michel Foucault and the Free-Market creed, 1976-1979*, pp.24-62., in Edit by Daniel Caroma&Michael C. Behrent, *FOUCAULT and Neoliberalism*, polity Press.
- (14) Boka En and Mercedes Pöll(2016), *Are you (self-)tracking? Risks, norms and optimisation in self-quantifying practices*, *Graduate Journal of Social Science*, Vol. 12, Issue 2, pp. 37–57
- (15) *Dawn Nafus, Jamie Sherman*(2014),*This One Does Not Go Up to 11: The Quantified Self Movement as an Alternative Big Data Practice* ,*International Journal of Communication* 8 , pp.1784–1794.
- (16) De Moya, Jean-Francois and Pallud, Jessie, (2017). "QUANTIFIED SELF: A LITERATURE REVIEW BASED ON THE FUNNEL PARADIGM". In *Proceedings of the 25th European Conference on Information Systems (ECIS)*, Guimarães, Portugal, June 5-10, 2017 (pp. 1678-1694).
- (17) Deborah Lupton(2016), *The diverse domains of quantified selves: self- tracking modes and dataveillance*, *Economy and Society*, vol.45, issue1, pp.101-122.
- (18) Scheiber, N., & Huang, J. (2017, April 2). *How Uber uses psychological tricks to push its drivers' buttons*. *New York Times*.
- (19) Amalina Zakariah, Sameer Hosany, Benedetta Cappellini, *Subjectivities in motion: Dichotomies in consumer engagements with self-tracking technologies*, *Computers in Human Behavior*, Volume 118., 2021. <https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0747563221000212>

ありがとうございました!!